日までを精確に記入せる事、重要なる人物の物故に際し、其年齢を記せる事、大正七年より逆算したる年數の一欄を設けたる事、閏月表を添へたる事等著者の用意の見るべきものあり、たゞ往々、植字の誤謬、界線の脱落あるは、惜むべし。（文會堂發行、價七五）〔中村〕

史眼に映ずる世界大戰　文學博士　箕作元八著

本書は著者が今次大戰の勃發以來、講演や雜誌に臨時發表したる時局に關係深き史論十餘編を輯めて一册子となせるものなり。載する所「現時世界大戰亂の亘相及由來」「近東に於ける獨佛外交の今昔比較論」「大陸封鎖の今昔論」「植民地整理に關する大戰前の英獨協商」「民族主義に關する獨逸思想の變調」「ドイツの被征服者に對する態度に就て」「露獨國是の絶對的衝突」「最近露國革命の由來」「佛露革命比較論」「ドイツの世界政策と我日本」「史眼に映ずる太平洋と其將來」の諸論文より成る、由來邦人の現世界の形勢を論ずる者多く根柢深き史的知識の素養を缺けるを以て、其言説動やもすれば粗放を免れず。現下の趨勢に對し堅實なる判斷を下し將來を豫察せんとするには、須く世界史に關する知識を培養し、現在の由つて來る所を明かにし、且史上の先例に注意するを要す。本書各篇の如き、孰れも著者が史的見解よりして時局を觀察し、而も廣讀者に對し既往に照して教訓する所ありし且特に我國の位置を說き邦人を警告せる點多きを以て、一般人士の繙讀して稗益する所甚大なるや必せり。（博文館發行、價、一、四〇）〔植村〕

希臘紀行　濱田青陵著

本書は著者が先に海外留學中、東京文科大學の市河三喜氏と共に希臘内地を旅行せる際の紀行なり、筆を伊太利出發に起して雅典の遺跡と風光とを說ける後、邦人としては殆んど最初の試みとも云ふべきクリート島の旅行を叙し、更にペロポネソス半島内地の探檢を載せ、北希臘への一歩を記して卷を終れり。四六判本文三百餘頁編中挿むに著者の自寫に係る貴重なる寫眞を初め圖版五十餘枚と卷末地圖一枚とを以てす。流暢なる本文と對照して一讀希臘の風光を想起し、榮ゆたる古代の文化と其の美術の一般を窺はしむ。（大鐙閣出版、價、二、七〇）

朝鮮古蹟圖譜　第五、第六册　朝鮮總督府發行

朝鮮總督府刊行の本書に就いては、去る大正四年創刊の際詳しく本誌上に紹介する所ありしが、本年に入りて近く第五、第六の兩册を出版するに至れり。其の體裁はすべて前四卷に同じく、大形美本にして、敢むる所第五册は新羅統一時代の佛像類、各種の古瓦、第六册は高麗時代の遺跡、何れも數百圖、當代の遺物遺蹟

は殆ど網羅し盡さるれば研究上の稗益少からざるべし。逐て説明書成るの後は東京巖松堂書肆より實費を以て希望者に頒たるべしといふ。

◎朝鮮總督府博物館陳列品圖鑑　第一輯　朝鮮總督府發行

本書は朝鮮總督府博物館に於ける陳列品の圖錄にして、毎輯竪一尺五分、横七寸五分の圖版十二葉より成り、別に和英兩文の説明書を添ふ。今回發行の第一輯收むる所は大同江面古墳發見の長宜子孫鏡、璧、携奩、神像瑞獸鏡、三國時代の彌勒像、慶州四天王寺址出土の甓、新羅時代の藥師立像、慶州發見同時代の骨壺、朝鮮古墳出土の海獸葡萄鏡、京畿道開城郡開國寺址七層塔中發見の妙法蓮華經卷軸、智光國師玄妙塔、高麗仁宗謚册の諸圖なり。何れも印刷鮮明、且つ其の多くは朝鮮古蹟圖譜刊行以後の發見に係るものなれば、同書と併せ看て研究上の好資料たるべし。

◎有史以前の日本　　鳥居龍藏著

東京理科大學講師島居龍藏氏が從來新聞雜誌等にて發表せる、考古學土俗學、人種誌等に關する論文、隨筆を集めたるものにして、其の「有史以前の日本」と題せるは氏が此の方面の研究に一時期を劃せりと稱する昨年八月の濱寺講演を記念せん爲なりと序言に言へり。載するところ石器時代關係の記事には「閑却されたる大和國」以下の諸論文を始め、「有史以前の武藏野」等あり其の間に著者が人類學者として過去二十餘年間日本四周の民族についての調査せる古代の日本民族、アイヌ、西伯利亞の人種、オロッコ、馬來種族と印度支那種族との區別、苗と猓玀、ネグリート等に關する諸編あり、又、考古學土俗學上の論文としては「銅鐸論」「人種學上より見たる弓矢」「朝鮮の土器作り」「倭人の文身」等の諸編を見る。前後通じて四百五十頁、所々に圖を挿入して説明の足らざるを補へり。而して初に本山彦一氏の著者を紹介せる文を掲げ、別に又た著者の所懷を述べたる序言あり。

是等の諸編中「閑却されたる大和國」以下此の種の四論文は著者の最も得意とする所にして、之を以て學界に於ける此種研究の新氣運を作れるものと自ら稱せらるゝも、嚴密なる意味よりせば必ずしも然らざるが如く、既に早く此の點に注意せる學者あり。されど氏の畿内調査が研究を盛んならしめたるは何人も認むる所にして、内に傾聽すべき所説多く、豐富なる見聞より成る他の諸編と共に一般斯學に興味を有するものに稗益を與ふる所少なからざるべし。（磯部甲陽堂出版、價、一、八〇）

◎Shinji Nishimura; The Hisago Bune.
(The Gourd- Ship)

本書は昨年「熊野諸手船考」を出せる著者の A study of the

ancient ships of Japan の第二冊として、去る七月海事協會より公刊せるものなり。本文三十八頁、圖版五枚、緒言外五章より成り、第一章瓢の土俗學的言語學的研究に次ぎ、第二、第三の兩章にて日本書紀所載の茨田堤築成の記事、三國史記等に見ゆる朴赫居世、昔脫解、東國通鑑の瓠公等日鮮兩地の古傳說に現れたる匏舟關係の傳說を考察して兩者の類似を擧げ、第四章は濟州島に於ける漁民の風習を調査して一種の浮具として瓢を使用せるを指摘し、土俗學上より上記傳說に對比する所あり。第五章結論として所謂匏舟と稱するは特殊の形狀を有する船に非ず。浮具として匏を附せる筏若しくば船に過ぎず、而して此の式は本邦船舶沿革史上著く北方型に屬するものにして、原始的なり。之が使用の民族は古史の倭人に當るべく、此の種の研究は日鮮古代史、土俗學、人類學上に一道の光明を與ふるものなりとせり。是等の結論は學者に依りて且つ所見を異にするもあるべく、猶考究の餘地の存するものあるが如きも、亦學界を裨益すること少なからざらむ。(造船協會出版、價一、五〇)

◎宮崎縣史蹟調査報告　第三冊

從來「宮崎縣西都原古墳調査報告」として出版せるものゝ第三冊なるも、今回の報告は其所載同地以外に亘れるを以て、特に表題を改めたるなりと云ふ。體裁すべて前冊に同じく口繪八葉、本文七十二頁より成り、收むる所の報告、大正二年五月鳥居龍藏氏の提出せる「日向古墳調査報告」大正三年八月の小川琢治氏の、「西都原史蹟研究所出張概報」原田淑人、柴田常惠兩氏の筆になる「西都原古墳調査報告」(大正四年八月)內藤虎次郎、今西龍兩氏の同じく「西都原古墳調査報告」(大正五年一月)の四編なり。中に就いて鳥居氏の文最も長編にして本冊の半以上を占め、石器時代より始めて古墳、チャシ等を日向全國に亘りて概論したるものにして、著者の一般考古學上の意見を述べたる所多し、本書中報告として注意すべきは柴田常惠氏の西都原第二十號塚の調査錄と、內藤、今西兩氏の同第二號塚に關する二篇なり。この中第二號塚は從來發掘せる西都原古墳中貴重なる遺物を出せる塚なるが上に、構造又た特殊の形式に屬して研究上興味を惹くもの、該報告は多くの正確なる實測圖を添へて詳細に記述したれば柴田氏の文と共に後の研究に資する多からむ、たゞ圖版中寫眞の印刷の不鮮明なるは惜むべし。(宮崎縣內務部印行、非賣品)

◎大阪府史蹟調査委員會報　第五號

口繪二葉、本文五十六頁より成る。載するところ文學博士喜田貞吉氏の「地名の話」「難波京」文學博士黑板勝美氏の「大阪の史的觀察」委員長南倉ヲ助氏の「含翠堂」同三宮元勝氏の「鐵眼禪師の書簡」の五篇なり。初の三編は同會開催の講演會に於ける

講演筆記にして「大阪の史的觀察」には我國の古くより農業本位の國家なりしに對し難波の地が商業中心として起りし所以を文化史的に考察せる點に於て興味深く、「地名の話」「難波京」の二編は何れも著者が久しき以前より提唱し來りし研究にして之れを平易に叙べたるは一般史的趣味普及に益するものなり、長南氏の文は平野郷にある含翠堂の事歴を記せるものにして、嘗て雜誌「歴史與理」に載せたる論文に似たり。（大阪府印行、非賣品）（以上梅原）

彙報

●京都帝國大學卒業證書授與式

京都帝國大學に於ては去七月十三日卒業證書授與式を擧行し御名代として梨本宮守正王殿下臨あらせられ、左の陳列品につきて擔任教授以下の説明を聞召されたり。

一豐臣秀吉書狀　文科大學教授文學博士　三浦周行　説明
一河内國府發掘石器時代人骨　文科大學教授　濱田耕作　説明
一慧星新星及本年六月九日日食の寫眞　理科大學講師　山本一清　説明
理科大學助手　上田穣

當日の卒業生四百四十八名、其中文科大學史學科に屬するもの左の如し。

古田良一、牧健二、辰馬悦藏、富森大梁、下川潮（以上國史專攻）
菅原憲（西洋史專攻）小早川彦一（同撰科）
工藤智一郎、勝田圭三（以上地理學專攻）

右の中古田良一氏は成績優等なるを以て恩賜品授與の光榮を荷へり。

●吉澤義則氏の學位授與

京都文科大學助教授文學士吉澤義則氏は同大學に論文を提出して學位を請求したるに對し同大學教授會に於て審査の結果同氏は去る八月二十六日を以て文學博士の學位を授與せられたり。其提出論文は「乎古止點の研究」と題し、乎古止點の研究緒言、乎古止點の研究、博士家點の研究の三篇より成り、外に逸點譜、加點書編年目錄の二篇を添へたるものなり。

●讀史會

例會　五月二十七日午後七時より學生集會場に於て開會、出席者三浦教授、西田講師、中村學士、牧、辰馬、富森、下川、鈴木桑原、橋川の十名なり。今回は毎年の例に據り特に在學生の爲め第三回生は各其卒業論文の梗概並に製作上の經驗等を述ぶること